

寄稿

せっかく生まれてきたのだから、 子どもたちには楽しい人生を送ってほしい

北海道おやこ新聞編集部 代表 松田みほ

子どもの教育の仕事に携わり、26年が経ちます。今から18年前、子どものしつけ・教育に関する本を制作している時に、変わりゆく時代のなかで親に必要な子育て情報が教育現場から明確に伝わっていないこと、北海道に熱意ある素晴らしい教育者がたくさんいるのにその考え方が保護者に伝えられていない現実を目の当たりにして、「子どもたちはどう育っていくのだろう」と強い危機感を覚えました。

北海道おやこ新聞 創刊

子どもたちが自立し、楽しい人生を送るためには、①親(保護者)が子育てに必要な情報や知識を学ぶ場があること、②教育に使命感をもつ熱意ある教育者の考えを保護者に伝えること、③子どもを取り巻く環境「学校(幼稚園・保育園など)・家庭・地域社会(医療・習い事など)」の情報をみんなで共有すること、この3つがとても重要だと思いました。その思いに共感して頂いた人たちに支えられて、2013年4月に札幌市内小学校配布の「北海道おやこ新聞」を創刊することができました。北海道おやこ新聞は、保護者が知りたい子育ての悩みや教育情報をもとに、教育、医療などさまざまな分野から子育てに役立つ知識や親子で楽しめる内容を掲載しています。

紙媒体だからできること

現在、北海道おやこ新聞は紙媒体で発行しています。紙媒体のメリットは、紙の重み・手ざわり・においなど五感にふれると、気持ちが落ち着くので読むことに集中できます。また覚えておきたい部分に線を引いたり、書き込んだり、大事だと思う部分を繰り返し何度も読むことができるので、見た人の理解を深め、記憶に残りやすいといわれています。忙しい時には「後で読もう」、「この部分はもう一度子どもと読もう」と横に置いておくと、時間ができた時にすぐに読めるのが「紙」ならではの良さだと思います。

これからの時代に求められる力

令和になり、日本は少子高齢化が進み、労働力人口の減少は深刻な問題です。危機感をもった日本は、男女ともに働きやすいように労働環境を改善したり、年齢・性別だけでなく人種・国籍・宗教・障がいなど多様な人材が個性を生かせる職場環境を整えています。また「人工知能(AI)」の導入で就労形態が多様化し「社会で求められる人材像」が大きく変わっています。従来の教育や社会では、問題や課題に対していかに一つの正しい答えをはやく出せるか、指示されたこと、

言われたことを能率よく正確に行うかが求められました。しかし、これからの日本は、さまざまな人の意見・考え方が尊重される社会になり「答えや受け止め方が人の数だけある」

「多様化する社会情勢によって答えが変化していく」などと答えが多様化します。2030年には49%の仕事が人工知能(AI)に代わるといわれています。いわば「勉強が優秀であれば安心」「勉強さえできれば食いつぶれない」という時代は、終わりつつあります。これからは、人工知能(AI)導入に必要な能力や人工知能(AI)にはないスキルを身につけるために、勉強だけに特化せずに「発想力・創造力があり、その場の状況や雰囲気、人の気持ちを感じ取る感性の豊かな人材」に育てることが求められます。

感性の豊かな子どもに

時代の変化に適應できる子どもに育てるためには、様々な経験を重ねていくことが大切です。例えば、幼少期に人形劇・演劇の鑑賞を重ねると、豊かな感性や想像力が磨かれます。物語の世界を感じ取ることで表現力・協調性・創造性が豊かになり、固執概念にとらわれずにいろいろな観点で物事を捉えながら、新しい発想を生み出し独創的なモノを創り出すことができます。自分が思いついたものを形にする創造力があると、不安定な時代でも今何を必要としているかを感じ取り、常に新しいアイデアや企画を生み出すことができるのでビジネスチャンスをつかむことが期待できます。また感性の豊かな人は、人の感情を汲み取る力やその場の空気を読む力があるので、組織のまとめ役として高く評価されます。

今後ますます価値観が多様化し、子育てに迷ったり、悩んだりすることが多くなるでしょう。しかし、子どもと一緒にいられる時間は一生のうちのごくわずかです。今この一瞬一瞬を大切に、子どもの成長に寄り添いながら、親子の絆を深めてほしいと思います。

■北海道おやこ新聞乳幼児版 年4回発行(春・夏・秋・冬)

配布・設置場所/児童会館・保健センター・幼稚園など

■北海道おやこ新聞小学生版 年5回発行(4月・7月・9月・12月・3月)

配布・設置場所/札幌市内小学校・児童会館など

松田 みほ(まつだ みほ)

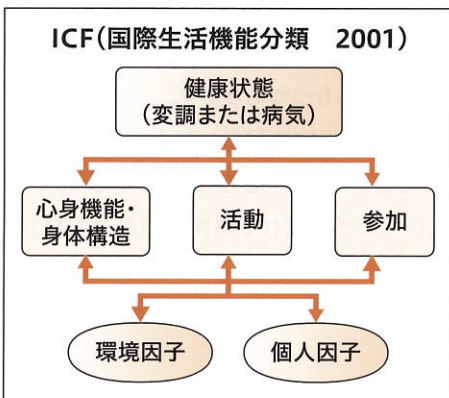
1961年生まれ 北海道函館市出身
天使短期大学 食物栄養学科卒業
株式会社ウィザード教育コンサルツ 代表取締役(子ども教育情報センター運営)
特定非営利活動法人おやこコミュニケーションネット理事
(北海道おやこ新聞発行)



障害は関係性の中にある

小野寺 基史

皆さんは“SHOGAI”を文字にする時、どのように表記しますか。「障害」「障がい」「障得」「しょうがい」など様々かと思いますが。法律用語では「障害」、行政用語では「障がい」が一般的でしょうか。行政機関にいた頃の私は「障がい」を使っていましたが、今はあえて「障害」と表記しています。それは、2001年にWHO(世界保健機関)で採択された「ICF(国際生活機能分類)」の理念に出会ったからです(下図)。



本連載は「視点をえてみよう」というコンセプトで、「自分の視点(目線)だけでなく、相手の視点(目線)からものを捉えてみる。定点だけでなく、多面的、多角的な視点(目線)からもものを捉えてみる」をテーマに進めていきます。

「ICF」は、障害とその人の生活機能を分けて記述しています。従来の障害の考え方は、図でいうと「その人の『心身機能・身体構造』の欠陥が障害であり、それはあくまでも『個人因子』に帰結する」とされてきました。しかし「ICF」では、障害とは『個人因子』から『環境因子』に目を向けること、その人の『心身機能・身体構造』ではなく、その人が『活動』『参加』できているかどうかによって焦点を当てるのが重要であったのです。つまり、障害とは「ある人の『心身機能・身体構造』としての『個人因子』から生じる」ものではなく、「その人の『活動』と『参加』が制約されている状態」と定義するわけです。換言すれば、「障害者と言われている人が安心・安全に活動や参加ができる『環境因子』が整備されれば、その環境下において、その人の障害はなくなる」ということです。まさに、「障害はその人の中にあるのではなく、関係性の中にある」ということです。

エレベーターや点字ブロック、音声案内等の「物理的なかべ」や「制度的なかべ」が改善されていく中、人的環境である「こころのなかべ」が改善されなければ障害はいつまでも改善されません。その人が障害と感ずるかどうかは、まさに、私たちの中にあるといえるし、ひょっとしたら、私たちが障害を作り出しているのかもしれない。私が「障害」の「害」の字をあえて漢字表記にしているのは、「障害はその人の中にあるのではなく、私たちの中にある」「私たちが障害を作り出している」といった逆転の発想に立って、私たちの責任を認識することが重要であると感じているからです。」

(参照)小野寺基史、デキる「指導者・支援者」になるための極める! アセスメント講座

小野寺 基史

(おののでもとふみ)

北海道教育大学 教育学研究科教職大学院特任教授
 名寄市生まれ。北海道教育大学札幌分校を卒業後、小学校の教員、札幌市教育研究所・教育センター指導主事、のぞみ分校教頭、札幌市教育センター教育相談担当課長を経て、現職。学校心理士、特別支援教育士SV



ほん MA・SO・BO シェルジュ HON-CIERGE

本のご案内「本シェルジュ」
 厳選本の紹介
 荒井さん編 ⑩

荒井 宏明(あらい ひろあき)

一般社団法人北海道ブックシェアリング代表理事
 札幌大谷大学社会学部、東海大学現代教養センター講師
 北海道子ども読書推進委員



『オニのサラリーマン』

著:富安 陽子、イラスト:大島 妙子 出版社:福音館書店

読み聞かせても子どもたちに大人気の作品で、じつは大人にもぜひ読んでほしい一冊です。作者の富安陽子さんの初夢を絵本にしたもので、富安さんは「面白い夢を見たな」というときには、ベッドの中でストーリーを15場面に割ってメモするそうです。「オニのサラリーマン」の元となった夢を見たときは、起承転結があって完成度が高く、その日のうちに原稿を仕上げ、担当者からOKが出たそうです。一男一女を持つ赤鬼のオニガワラ・ケン。通勤地獄に耐えて勤務先の地獄カンパニーに着くと、そこでの仕事もなにかと大変。地獄でもいろいろな仕事があって、いろいろな人が頑張って社会が成り立っているんだな、と考えると、少し気持ちが前向きになりませんか?



『日本のスゴイ科学者 29人が教える発見のコツ』

著:日本科学未来館 出版社:朝日学生新聞社
 かつて「科学技術大国・日本」というキャッチフレーズが広く喧伝された時代がありました。大阪万博(1970年)の成功や大手電機メーカーの世界進出などによって、高度経済成長期からバブル期にかけて「科学技術先進国」というイメージを日本人は持つようになりました。最近、このフレーズをあまり聞かなくなったため「スゴかったのは遠い昔のこと」と思い込んでいる人も少なくありません。ところが日本はいまがまさに「科学技術大国」真っ盛り。21世紀になってからのノーベル賞の自然科学系3賞(物理学賞、化学賞、生理学・医学賞)受賞数は、アメリカに次いで第2位という健闘ぶりです。日本屈指のスゴイ科学者たちの声にぜひ耳を傾けてください。



『ふつうじゃない生きものの飼いかた』

著:松橋 利光 出版社:大和書房

スーパーで買ったアサリを育ててみようなんて考えたことがあります? 冷蔵庫でクリオネを育てるとか、生きものの「普通じゃない飼いかた」が次々と登場します。「食用の生きたイセエビを飼ってみて、もし弱ってしまったら食べちゃおう」と聞くと「えー、残酷だな」とか「命をなんだと思っているの!」と感ずるかもしれませんが、感謝とともにいいいに料理して、おいしく食べるのも「命との向き合い方」のひとつです。生きものを飼うには準備や知識や粘り強さや工夫が必要で、それらは社会を生き抜いていくために必要なことです。身近な生きものと過ごすことは、自分が生きていくため、だれかを支えるための知恵と心構えを獲得する貴重な機会ともいえます。



編集後記

先日やっと、宮崎駿監督の最新作映画「君たちはどう生きるか」を観ました。以前、子どもたちに「この世は生きるに値するんだ」ということを伝えるのが根幹になればいけないと思ってきたとお話されていて、まさに尊い子ども文化だと思いました。構想から公開まで8年かかったこの映画、なんて瑞々しいんだろう。さあ私たちはどう生きる? どう生きた? (柳本)

札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397

お問い合わせ 札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886
 お申し込み 〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号
 (地下鉄南北線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

MA・SO・BOに関する最新情報、
 MA・SO・BO通信のバックナンバーは
 ホームページからもご覧いただけます。

